

なお固定のすんだものを保存する場合は 95% アルコールで洗つたのち、70% アルコールに移しておく。ただし保存が一週間以上の場合には良好な結果を得にくいのが次のような再固定をほどこすと比較的良好な結果が得られる。すなわち、氷酢酸と無水アルコールを 1:1 に混ぜた液に 1 時間浸し、さらにクロロホルム、無水アルコール、氷酢酸を 4:3:1 の割合で混ぜた液に約 2 時間浸す。また永久プレパラートの作成は Buck 氏法によつた。

研究に用いた材料は伊豆天城山、静岡県中部、秩父、奥多摩、東京小石川および茨城県八溝山の各地で採集した。

**観察結果** 結果を前頁の表にまとめた。このうちホウビシダとヤブソソテツはアボガミーをなすものと考えられる。すなわち兩種とも孢子母細胞は 8 個で、成熟した孢子のうちには 32 個の孢子が見られた。なお表の中の学名は大井：日本植物誌(1957)シダ編のものを使つた。

### Résumé

Gametic chromosome numbers of 23 species with one variety of Japanese ferns are reported as shown in the table in which letters and numbers of right column correspond with those of photographs and text figures.

#### ○アマドコロの一品 (檜山庫三) Kôzô HIYAMA: A new form of *Polygonatum odoratum* var. *pluriflorum*.

アマドコロ (*Polygonatum oponatum* var. *pluriflorum* Ohwi) で葉裏の粉白色をおびぬものがあると、小林純子氏が千葉県茂原で 1960 年 4 月に採集してこられた。葉下面は淡緑色である。一般にアマドコロは茎の葉の着け根のところが紅紫色となるものであるが、そでの色も淡緑である。花などは常品と変らないので、これを一品種として認め、アオアマドコロ (forma *concolor* Hiyama) の名を与える。

*Polygonatum odoratum* (Mill.) Druce var. *pluriflorum* (Miq.) Ohwi  
forma *concolor* Hiyama, nov. form.

Folia subtus pallida non glaucescentia.—Nom. Jap. Ao-amadokoro, nov.—Hab. Hondo: Mohara, Prov. Kazusa (Sumiko Kobayashi, Apr. 29, 1960—typus in Makino Herbarium).

#### ○ヤマソとはなにか (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Of the dialect of *Senecio cannabifolius* Lessing

ヤマソという方言は、よくイラクサ科のもの、ことにアカソやカラムシに用いられるのが普通である、ところが、信州白馬山下、四ツ谷の旅館で出す漬物の風味がすぐれていたのので、材料をただしたら、答はヤマソであつたが「ソ」の名で呼ばれそうなものではない。もともと、ソは繊維と関係のあるものであるのに、この材料は香気の臭からそんなものでないの現物を溪から送らせたならハンゴンソウ (*Senecio cannabifolius* Lessing) の若芽とわかつてなつとくした。ハンゴンソウは、学名と同様、葉の形状からきたと思はれる、ヤマアサという名もあるから、このヤマアサの転化でアカソのようなイラクサ科のヤマソとは起原が別のようなものである。とにかく、ハンゴンソウにこんな方言のあることは事実である。しかし、同地方の方言であるか、その旅館だけの名であるか不明である。